

KSKQ

ゆうとおん

通信

NO.106

2017 年 10 月号

郵便振り込み口座 00910-9-106532

編集人 (社福) ゆうとおん ゆうとおん編集委員会 八尾市久宝園 2-30-4

一九九一年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日) 発行 定価 50 円



内田 健太(うちだ・けんた)
1996年生まれ。20歳。八尾市立特別支援学校卒業後、ゆうとおんに。現在3年目。「一年目はほとんど作業ができない状態でしたが最近は少しずつ作業に参加できるようになり、うれしく思います」とお母さん。柏原市在住。

内田さんに関わる職員が口をそろえるのは「笑顔」の魔力。
「あの笑顔を見せられると、まあ仕方ないか…と許してしまいます」と付き合い始めて3ヶ月目の新人職員の栗野。ベテランの松尾も「やっぱり彼の最大の武器は笑顔ですね。うれしいときは勿論なんです、あつ、それは困る!と止めに入る場面でもこちらを戦意喪失させる笑顔なんです。あのね…と思いながら、いつの間にか、たいていのことを許してしまう。内田さんは周囲と付き合い合

ここで、生きる

人シリーズ No.3

コッをよく心得ている人だと思えます」と言います。

そんな内田さんですが、お母さんは「小さい頃は健太の気持ちをわかってやれず試行錯誤の毎日、泣き伏す私を見て幼い長男が『お母さん、健太はちゃんとできるようになるから』と励ましてくれたこともありました。思春期は先生に手を挙げることもあり、落ちつかない日々の連続でした。その都度、先生が相談ののってサポートして下さいました。今もそうですが、常に周りの方に支えられて来たことに感謝の気持ちでいっぱいです。健太の成長とともに私が成長させてもらったと思えるようになりました」と、そんな話をして下さいました。

内田さんの魅力と魔力にやられっぱなしの職員ですが、当の内田さんはどんな思いが訊ねると、やっぱり笑顔。なんだか、はぐらかされたような意味ありげな笑顔でした。

(聞き手・富澤久美子)

目次

- ・特集 連続学習会 最終回報告 ……2
- ・虐待を考える (堀 智晴) ……4
- ・わたしの体験 (秋田 貴久子) ……5
- ・一泊旅行 ……6
- ・新入職員研修 受講者感想 ……7
- ・アンテナショップ / 学生食堂 / リレーエッセイ ……8
- ・あれが言いたい、これも言いたい (松田・福井・稲垣) ……9
- ・当世作業所事情 (畑 健次郎) ……10



連続学習会 第6回報告

『もういちど自閉症の世界に出会う』 を読んで語り合う 〈最終回〉

監修 エンパワメント・プランニング協会

編者 浜田 寿美男 / 立命館大学特別招聘教授・奈良女子大学名誉教授

村瀬 学 / 同志社女子大学生生活科学部特任教授

高岡 健 / 岐阜県立希望が丘こども医療福祉センター

(児童精神科部長／発達精神医学研究所所長)

発行 ミネルヴァ書房

今年の2月から始めた連続学習会は最終回に編者のお一人である浜田寿美男さんをお招きしました。

■第6回学習会 7月26日(水)

「相模原事件を考えるために」

「『発達』という思想がはらむ問題性」

講師 浜田 寿美男さん

講師の浜田寿美男さんの話は、いつ聞いてもそのベースにあるあたかさと謙虚さ、そして人間理解の深さが伝わってきます。「人はみな、自分の渦中を生きている」と浜田さんは言います。しかし、他者の生きている渦中は見えにくい、そこに生きづらさの要因のひとつが潜んでいます。そして他者の渦中を見ようとする思いがなければ、いくら福祉の現場に長くいても、植松容疑者のような人が出てきます。彼の行為は特異かもしれませんが、「思想」はわりと一般的です。

浜田さんは、なにかを一緒にするという中で育まれるコミュニケーションのたいせつさも語ります。「みんなでつくるはたらく場」を豊富化させるなかで、浜田さんの示した課題に添えていければと思います。他にも「弱いロボット」の話。力を身につけることが、その力を使って生きることにつながっていない話。…宿題をたくさんもらった研修会でした。

(畑 健次郎)

●「発想を変えると人の見方がちがってくる」

浜田先生の講義を終えたあと、考えさせられた。いつも私たちは障害者の人たちと対等に向き合って、そして支援できているだろうか。支援といっても彼らの出来ないことを支援するのであって、出来ることまで支援しているのではないかと。守るだけの支援、助けるだけの支援、その歪んだ思い込みが間違った支援につながる。凝り固まった概念でモノを見る自分の癖は直さなくてはならないと思う。浜田先生の言われた「発想を変えると人の見方がちがってくる」を頭の片隅においておきたい。

(古川 晶子)

●いつだって、「いまのまま」から始まる

今日はいいいお話が聞けたなと思った。日頃これってどうなん?と思っていることが、やっぱりそうやん!と思える話だった。支援者がその人のためによかれと、どんどん足しているのを見るが、しんどい話だ。今のままではだめなのか。昨年発達障害のメンバーさんとのやり取りのなかで「わかった。そのままでいい。仕事のノルマもないし、ゲームもクレーターの利いた部屋でやってよし。工賃も最低限みんなと同じように保障する。あなたにとって、ここは働く場ではなく居場所のひとつなんだね。それでもいい」というところから仕切り直して一年。仕事量は変わらないものの終わりの会に参加、自分の意見を言ったり人の意見を聞いたり司会をしてくれる

ようになった。周りが、その人がどんな状態でも存在価値を認めたところから始まり、何をどのよう足していくかはその人自身ではないだろうか。仕事はまだだが、みんなの中に入ることは足してくれたと思う。足し算の手助けができたらと思う。

(富澤 久美子)

●もどかしくても議論をやめないことが大切

人それぞれ、100人いれば100通りの育ち方があり考え方が異なる。どれが正解とは簡単に決められない。大切なのはこうした話し合いの場を増やしていくことだと思う。相模原事件でも一年経ち、数日はメディアも取り上げるが、それを過ぎると口にもしなくなる。大震災も同様、風化して何も語らなくなるのが一番危険だと思う。議論が続ければ少しずつでも前に進める。その積み重ねが大切。ぽーんと進めないのがもどかしいけれど100通りを一つにするのはとてもとても難しい…。(岩中 尚子)

●「内側の世界」を知ろうとする想像力で

お話を聞きながら、自閉症という切り口の感想ではありませんが、知的障害のある女性のことを考えていました。私たちのような言葉は発せませんが、彼女独自の発語とジェスチャーで周りとのやり取りを楽しんでおられます。時に自身のもつ「こだわり」が通らなくなると(特に体調の悪さが重なる)職員に他傷行為を行い、それでも気がすまない

ときは自傷行為にまで発展していきます。浜田先生の章を読みながら、「もしも自分が彼女のように言いたいことが相手に通じず、またやりたいことができなかつたら…」と想像したことがあります。そう思うと外見や言語の障害は、まるで思い通りに動けない「着ぐるみ」のようで、本人は必死になってもがいているのかもしれない。訴えや要望は完璧には分かりませんが、彼女が心地よく「さをり織り」をされている時は声のトーンも軽く表情も柔らかなので、じっくりと耳を傾け続け、彼女のこころの聲が聴けるよう努めていけたらと思っています。同じ職場で働く仲間としては当たり前のことかもしれませんが。

(北浦 加代子)

●「当たり前」の呪縛。ひそむ差別性

浜田先生の話聞きながら、「当たり前」の感覚に自分はどれほど囚われてきたのだろうかと考えました。私たちは、歩くことも、話すことも、目が見えることも、耳が聞こえることも、実はそうなるために訓練した、努力したという記憶は全くありませんし、たぶん分からないままそうなっていたというのが正直なところだと思います。だからこそ、そのことが「当たり前」の認識に至るのかなと。ところが、そのことは当たり前ではなく、いつ壊れても不思議ではないと実感するのは、不慮の事故や病気などが自分の身に起こった時です。この仕事をしながら、自分が車イス生活になったり、目が見えなくな

ったりしたら平然としていられるだろうか、そう考えると自分のなかにある差別性をまざまざと感じます。当たり前の感覚はそうでないものに対して差別を生み、最初は不思議に思う感覚が面白さに変わり、いつしかそれがいじめや排除に変わり、社会に出る頃には同情や無関心、嫌悪に変わることがあるのかもしれない。先生は「相模原事件」にふれ、介護を通じた容疑者の関係性の貧しさを指摘されていました。自己解釈ですが、彼の介護は一人よがりで行方通行、だから貧しさやむなしさが漂う、そんなふうに受け止めています。最後に、これも先生が言われていたことですが、自然の壁にぶつかった場合、人は悲しみでつながる。でも人間の壁にぶつかったと腹が立つ。うん、うんと思うず領く名言でした。

(山本 寿)

●「渦中」の視点に立つ難しさ、自覚して生きる

子どもの頃に読んだ本に「人が友を裁いていいのは友の立場に立った時だけだ」とありました。本当の意味で相手の立場に立つのはとても難しいと思います。その言葉はいつも自分の中にありました。先生は「渦中の視点に立つ事がいかに難しいか」と話されていましたが、当事者の方も私もそれぞれの人生を生きており、抱えているものを全て理解できなくても分かろうとすることを大切に人を裁いたり、「神」のようになり人を見下ろしてしまわないよう心して仕事や生活をしていこうと思います。

(M・K)

シリーズ 1

虐待について考える

ゆうとおんでは、今年5月に「虐待防止等職員セ
ルフチェック」の調査を実施しました。

集計結果からなにが見えてくるのか、理事の堀智
晴さんに分析を依頼しました。虐待の認識、組織が
抱える課題、職員間の関係性など虐待の背景にある
問題についてシリーズで取り上げます。



堀 智晴（ほり・ともはる）

1947年生まれ。長い間、障がいのある子どもの保育、教
育について、現場の保育者や先生と共同研究に取り組む。「今
は、学校卒業後に、障がいのある人が地域の中でどう生きて
いけばいいのかについて考えています。みなさん、一緒に考
えましょう」。インクルーシブ（共生）教育研究所代表。
ゆうとおん理事。

1. アンケートの目的について

今年（2017年）の5月に、虐待防止のア
ンケートを行いました。その結果を見て、職員
の利用者とかかわりを見直してみる必要が
あると思いました。職員のみなさんといっしょ
に考えてみましょう。今回はその1回目です。

アンケートをする時、その目的について考
える必要があります。職員の皆さんはどのような
目的を考えましたか？堀は主に次の3点を考
えます。

- ①自分と利用者とかかわり方を見直すため
 - ②気づかないうちに虐待をしていないか日頃
のかかわりを振り返るため
 - ③のぞましいかかわり方をするにはどうすれ
ばいいか、に気づくきっかけにするため
- この3つについて、堀は次のように考えま
す。

①については、本音でアンケートに答えてい
るか？正直に自分の利用者とかかわり方を
見直すことが大切だと思います。

②については、利用者さんと自分との実際の
かかわりの例を一つ一つ思い出して考えてい
くことが大切だと思います。

③については、自分も生身の人間なのでつい
あやまったかかわり方をしています。

2. 虐待とは何か？について

その時は、そのあやまりを少しずつ直してい
けばいいのです。

虐待について考える時、一番大事なことは
次の点です。「こちらに（私には）虐待して
いるという気持ちはないと思っても、相
手が虐待されていると思っていたら、それは
虐待になるということです。」この点は、な
かなか納得がいかない、と思うかも知れま
せんが実はそうなのです。

たとえば、5月のアンケートでも、「利用
者の頭や体を、軽くであっても叩いたり押
したりしたことがある。」の回答は次のよう
になっていました。

・日中職員27人のうち、「はい」が10人、「い
いえ」が17人でした。

・グループホーム職員18人のうち、「はい」
が0人、「いいえ」が18人でした。

つまり、日中職員の3分1以上の人が虐待
をしているのです。グループホームの職員は
0人でしたが、本当でしょうか？

また、「利用者に一度でも、『うさせません』
等の圧力をかけたり行動制限をしたことが
ある。」の回答は次のようになっていました。

・日中職員27人のうち、「はい」が15人、「い
いえ」が12人でした。

・グループホーム職員18人のうち、「はい」
が8人、「いいえ」が10人でした。

堀は、この回答は、正直に回答している
必要があります。職員は自分にきびしく反省する
必要があります。

（次号に続く）

がっこうじだい ■学校時代

わたしは、中学校を卒業してから、高等専修学校に行きました。学校には洋裁と和裁のコースがあって、わたしは和裁でした。わたしは何もして
いないのに校内で複数の人からいじめられていました。

女の先生にサッシで肩を叩かれたこともありましたが、先生は、和裁で使ったはさみを返す時、「わたす方向が違う！」って大きな声で怒るし、もっと丁寧に、こうやって、はさみは危ないから持つ方はこっちで、切る方が
こっちって、ちゃんと教えてくれたらいいのに、「ちがう！」って大きな声で
どなるだけで、それがすごく嫌でした。いきなり、怒られたこともあって、
それで運針三本縫ってこいとか、襟ぐけやってこいとか。なんであんな言い
方しかできないのかなと思いました。高校の3年間はおもしろくなかったです。
本当は家の近くの高校に行きたかったのに、お父さんが駄目っていったからです。

はたら ■働きはじめて

高校を卒業してから、おしぼりの会社で7年間働きました。立ちっぱなしでした。いやだったことは、「汚れたおしぼり巻いているの、だれや！」って、あそこの会社の奥さんが「あんたか！」って、偉そうに私にいいました。わたしは、どなられるのは嫌いです。ふつうの声で言ってほしいです。
大きな声じゃなくて、働いているわたしたち女の人に対しても「こいつ」
とか、「おまえ」とか言って、ちゃんと名前前で呼んでくれたらいいけど、名前
で呼ばないのがすごく嫌でした。みんな辞めていきました。残って（残業
して）巻けて指示が出たことがありました。一日に3000～4000枚って、
はじめから目標を言ってくれたらいいけど。なんで、やさしくないのかな
と思っていました。ふつうの言い方をする人がいませんでした。でも、お
給料はよかったです。3万円から4万円もらっていました。預金していま
した。おしぼりだけでなく、たまに鳩の絵がかいてあるタオルをまきま
した。結婚式に使うやつで、それを袋づめにしたりもしていました。この
仕事はすきでした。

■ゆうとおんにきて

楽しかったのは、厨房の手伝いをしていたときに、「頼りにしているわ」
って職員さんが言ってくれたことです。寒い時は、お互いに「さむいね～」
って、そしたら「ほんまやね、さむいね～」って。わたしは、こういう会話が
好きです。職員さんは、「なにしてんねん！」じゃなくて「ちょっとごめん
ね」って言ってくれたらいいと思います。わたしは、大きな声がきらいです。
どなったりしないで、ていねいな言い方で接してほしいと思います。

わたしの体験

「みんなできめる会」は、つらかったことや、うれしかったことを、みなさんに聞いてもらうために、これまでの体験をまとめました。これから、じゅんばんに、はっぴょうしたいとおもいます。こんかいは、秋田貴久子さんです。

ゆうとおん*秋の1泊旅行

2017.9.7(木)～2017.9.8(金)

～神戸方面～

1日目

9:00 集合
9:15 出発

11:00 海洋博物館
カワサキワールド

13:45 遊覧船!

14:45 バス乗車

15:00 ホテル到着

18:00 宴会開始

21:00 宴会終了・消灯



バスではビンゴをしました

船乗って気持ち
良かった・山口

初めてフェリー乗って
緊張したけど
泣けへんわ!!・森



良かったわ、
途中で(カラオケを)止められてしまった笑・大鵬



ご飯食べた、おいしかった
歌った、楽しかった・鶴山

(メリーゴーランドに)乗ったよ・益山



全員で記念撮影♪



バスで動物見た、良かったわ・西村

2日目

7:00 起床
7:30 朝食

9:15 バス乗車

10:30 姫路セントラルパーク

12:00 昼食
(パーク内城の風レストラン)

14:30 バス乗車

15:10 めんたいパーク神戸三田

15:40 バス乗車

17:30 ゆうとおん到着・解散



バス良かったわ!・小林・憲

楽しかった・長岡



はっぴ着て記念撮影
めんたいこ美味しい!



2日間、たっぷり楽しんできました!

■「卑屈にならず傲慢にならず小さな違いに囚われず、ないがしろにせず」の言葉が残っています。支援者としてではなく私たちが生きていく上で大切なことだなと思いました。(山内 克美)

■「支援という言葉の持つうさんくささ」など一見福祉の仕事の自己否定のようにみえる理事長の言葉にはいつも考えさせられている。配布された資料にも「支援という言葉の持つ一方通行性、管理性には充分留意しなければならない」「個々の『発達』に固執するのではなく生きた関係のなかで一人ひとりの可能性の開花に注目したい」とあった。個々の問題に正解などないが、自分や自分を育てた「常識」を見つめながら本当の支援のあり方をここで探っていきたい。(新 神武王)

■事故や怪我、トラブルを避けるためにも個別的な事(病気・投薬時間・排泄)、スケジュール調整、金銭の授受などの報告・連絡・相談の大切さに改めて気づきました。凝り固まったやり方だけでなくとありましたが、利用者さんから髪を引っ張ったりされると何故するのか、どうすればいいのかまだ自分で考えることは出来ずにいます。どうしたらやめてもらえるか考えられるようにと思いました。(石田 育葉)

■相談支援の方たちの仕事内容を聞くことができ、たいへんいい機会でした。内容は初めて聞くことばかりで全て難しく感じました。福祉の仕事は未経験だったので障害者に関する法律など全く知識がなくて難しいことだらけでした。(中村 祐実)



■「独りよがりな支援にならないようにする」というところが大切だと感じた。改めて一緒に働く職員との意見交換の必要性を感じた。主要法律の説明では重なっている部分も多く、現場から見た関係する法律の内容などもっと詳しく知りたい。メンバーさんがどのサービスを利用されているか気になるのでサービスを理解する上でも、もっと知りたいと思った。(柴野 真人)

■「自分自身のこともふまえて」と個人情報の扱いについて話されたのを聞き、私も何気ない時に情報を言ってしまうそうになりハッとなることが度々あるので気をつけなければと改めて思いました。(大岡 由香里)

■今、ちょうど私が悩んでいることを体験談として話されていて、みんな同じような経験をしているということが分かりました。悩んでいるのは自分だけではないということを知り少し気持ちが軽くなりました。職員同士の連携もまだできていない部分も多くあり、報連相がしやすい関係性ができればいいと思います。(奥村 美月)

■今まで高齢者の現場にいたので障がい者の方の事業に関わることがなく、飛び込んでみたものの今もまだ分からないことだらけです。福祉の仕事は始めは生活のためでした。社会のことも何も理解してない未熟者で失敗も沢山し悩みが尽きない日々ですが、今では飛び込んだこの仕事が凄く楽しく、この仕事をして良かったと思っていたので「体験談」を聞いて共感することが沢山ありました。人と人との関わりが薄い現代で密にその方々と関わり、その人のことを考えていく事はとても難しく果てしなく感じることもいっぱいですが、この先もずっと関わっていきたいと思っています。(川上 純奈)



☆2017/4月リニューアル OPEN!

福祉のコンビニこさえたん

一般財団法人エルチャレンジ福祉事業振興機構

ゆうとおんのクッキーや 紙すき製品がならびました!

大阪府庁の1階郵便局横に設置されたアンテナショップこさえたんの委託商品に採用され、クッキーや紙すき製品が7月から9月まで店頭にならびました。外部専門家による審査会で「クッキーはレーズンとクルミのマッチングが良い」「見た目は地味だが味が良い」「リピーターを狙う商品にしてみたら?」のコメントをいただきました。

試験休み、ゆうとおんのカフェに友だちとパフェを食べに来てくれる学生さん。パンを買いに来て下さる先生たち。目と鼻の先の高校との交流が、十月から「学生食堂」の委託運営という形で発展することになりました。

大阪府立八尾北高校で 「学生食堂」を始めます

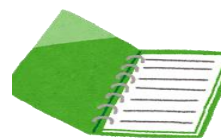


↑棚の中央にあるのが紙すき製品。「果物や花のイラストがかわいい」「紙すきの素朴な雰囲気とテイストも合っている」「ミニレターセットはシールもついていて完成度が高い」の評価をいただきました。10月から12月までの下期の販売にも引き続き応募しています。多くの方が行き交う大阪府庁のような場所で府民のみなさんの目にとまり手にとっていただけたらうれしいです。(福井 志朗)

長く貯金や簡易保険の仕事をしてきた。証書には、満期日や最終の保険料払込日などが記載されており、実際にはなかった昭和70年とか書いてあったりする。平成になってからでも今が昭和の何年にあたるか分からなければ仕事にならない。そのせいで仕事を辞めた今でも、正月が来ると毎年、昭和の何年になったと意識せずにいられない。(ちなみに今は昭和92年だ)自分は西暦派だが、昭和、つまり戦争の時代を忘れることはない。戦争を知らない人間ばかりになってしまふことほど恐ろしいことはない。

(稲垣 寛子)

空襲警報に飛び起きて逃げ惑った母のことをすぐに思った。広島に生まれて兄も被爆した父よりも、大阪市内で焼け出され焼け野が原をその目で見た母の方が、戦争は嫌だ、戦争は恐いと繰り返していた。ミサイル対策に防空壕なら、断然古墳が安心だ。幸い、柏原市は市民一人当たりの古墳の数が日本一多い。歩いて20分ほどの恩智の山にも、横穴式古墳が沢山ある。毒のあるマムシが先客だが、彼らも人間の10人や20人くらいは入れてくれるだろう。



リレー エッセイ No.1

夜はラジオをつけっぱなしで寝る。先日は緊急地震速報の音とは違う短い警告音が鳴った。「〇〇の途中ですが」の前置きもない。北朝鮮のミサイルが発射されたという。

全員参加の研修って…意味あるの？

「連続学習会」最終回、浜田先生の「人はともに何かに取り組むことで良い関係が築ける」との言葉。その言葉を最後に聞くことができ長かった研修が実りあるもので終わったように感じました。今回は職員が持ち回りで学習会を担当しましたが、著者の理論を短期間で自分のものにできるわけもなく、参加者が内容を消化しきれない場面も多く見られ、果たしてどれくらい意味のあるものになったのだろうかという疑問が今もつきまとっています。どうすれば良かったのか、やはりもっとしっかりと総括する必要があると思います。あくまで結果論ですが、最初の5回は全員参加の形式を取る必要はなかったと感じています。自由参加にして研修の質を高める工夫をしてからでもよかったのでは？ 限られた時間のなかで今の職員にとって必要な研鑽の場はどういうものか、改めてよく考えていく必要があると思いました。（松田 健太）

緊急時の体制、まずは急いで点検を！

大阪障害者自立生活協会主催の「グループホーム世話人研修会」に参加した。Nさんの生活を支えるのに役に立つ知識や技術を学びたいと思ったのが理由だ。介護技術や誤嚥予防の具体的なレクチャーではなかったが、あらゆるところに誤嚥の話が出てきた。発表の2例は実際に起きたケースで、特に1例目は、誤嚥事故が起きる前と起こってからへの対応等を時系列で報告され、リスクマネジメントの意味で事業所が事前に把握、準備しておいたほうがよいマニュアル関係の書類や対応等の話があり、とても参考になった。2例目は誤嚥予防の取り組みの話で上手に水分補給をしたり食べ方など生活のあらゆる場面で誤嚥を起さない工夫をされていた。Nさんだけでなく誤嚥の可能性のある方には役立つ知識だと思った。ゆうとおんでも、緊急時の連絡体制や事故発生時の対応等のマニュアル整備は急がれる課題だと思う。これくらいなら大丈夫だろうと支援者に慣れが起きていないか。時間の経過で危機意識が薄れ書類等が最新のものに更新されていない可能性もある。まずは急ぎ点検が必要だと思った。

（福井 志朗）



みんなでつくる働く場？ 絵空事になっている

行き当たりばったりが信条だが、それでも、日々、自分の中の優生思想と向き合っている。自分の差別意識を垣間見ることもしょっちゅうだし、これは虐待やなあと後で反省することもある。例えば“メンバーさん”という呼び方にしても、職員ではない、つまり健常者ではないという事実を、さも私は差別していませんよと言わんばかりに覆い隠しているように感じる。それならよほど“利用者さん”の方が直接的でスッキリしている。

Mさんが「頼りない職員で苦勞する。」とか言う。考察の鋭さは確かだ。彼女は自分のことをどう位置づけているか、障害についてどう認識しているか、それは不明だが、職員はメンバーとは違う、相対するものと捉えているに違いない。「今日はクッキーは4人やなあ。」と言うNさん。その人数に職員が含まれることはない。みんなでつくる働く場となっていない現実を突きつけられる。

メンバーも保護者もいる総会で、職員の賃金を上げることが歓迎されるような話をするのもデリカシーに欠ける。クッキーの仕事の9割は、メンバーも職員も分担こそあるが、同一労働に違いない。私一人が皆の尻叩きをしてフル回転させて、今や只のクッキー工場の姿を呈している。支援の仕事は1割もない。「個人記録簿」と「送迎」だけではないか。

（稲垣 寛子）

●当世作業所事情68

「共に生きる」ということの

周辺風景 その2

畑 健次郎

「サイテー、殺す モンスターマン」。

Aくんから物騒なメールが届いています。そのメールの前、何度か電話でやりとりしています。

彼の用件は、たいていガイド（移動支援とホームヘルプ）のことか、お金のことです。担当者につながるらない時、私に電話が来ることがあります。「ぼくではよく分からないから、担当者と直接話して」と言っても承知しません。気になったら、自分が納得いくまで訴え続けます。彼は一見、おっとり、そして頼りなげにも見えます。かつて私は、その印象を前提に彼と接してきました。ある時、電話の向こうから「殺したるか！」と怒鳴られたときはびっくりしました。いい気分ではありませんが、その豹変ぶりとたくましさには感心させられました。

メールの話に戻すと、何度かのやり取りで面倒になつていた私は、留守番電話に気付いた後も返信しませんでした。そしたらしばらくして先のメールが

た届いという次第です。

Aくんは、今は一人暮らしですが、以前はグループホームの住人でした。自分の気に入らない世話人の時は、帰宅時間を遅らせる等、もともと意思のはっきりした人ではありません。

9月7日、8日はゆうとおんの一泊旅行でした。Bくんは、グループホームの住人で、日中はゆうとおんの作業所に通所しています。多くの人が楽しみにしている旅行ですが、彼は旅行に行きませんでした。彼が楽しみにしているのは、旅行のための積立金が返金されることです。

ゆうとおんのグループホームは、月曜から金曜日にかけての5日間、朝10時から夕方4時まで世話人は不在です。入居者が体調不良の時は病院に同行したり、ホームで休んでもらったりしていますが、通常は無人です。Bくんには、仕事（旅行に行かない人のために一部開設しています）に来るもよし、アリオあたりでブラブラするもよし、実家に帰るもよしと伝えました。彼は「ホームでのんびりグダグダしていたい」と言います。ホームに対する管理責任があるからそれは困ると返答しました。「そんなに好きにしたいのであれば、ひとり暮らしを考えてみれば」と水を向けても、その話には乗ってきません。

彼はグループホームの前は、大型の入所施設にいました。地域移行でグループホームにやってきて10年近くなります。アニメとゲームが大好きで、アニメソングのライブにも出かけます。夜は12時過ぎま

で起きていますが、朝はきちんと一人で起きてきます。作業所には自転車で通所しています。時々発作があるので、自転車での通所は若干のリスクを伴います。彼の両親とも相談して、多少のリスクはあっても、彼を意思を尊重しようということになりました。

今回の件に関してBくんは、事業所側が日中は出てくれというのであれば「インターネットカフェに行くから、その分の金を出してくれ」と要求してきました。私は「そんなことは事業所としてはできない。ホームのルールを守ってほしい」と、いかにも管理責任を盾にした対応に終始します。実際のところ、火の始末の問題、異性とのトラブルの問題等、リスクはないとはいえませんが。リスク云々で対応を考える発想は基本的にいただけませんが、他の人とのバランスも考えて「どうぞ、ご自由に」とは言いませんでした。

Bくんは作業所やグループホームの職員には、事業所（畑）の都合に合わせたホーム運用に対して「おれは、木曜も金曜も、昼間ホームに居るから」と宣言し、実行しました。抗議の意志を込めて、水曜日の日中もホームに籠りました。世話人に対しては、「とりあえず10時には出るようにうながしてほしい」と伝えました。もちろん、やわな説得に応じなかったのは言うまでもありません。

ゆうとおんのグループホームはスタートして10数年になります。入所施設のように、入居者を施設

の時間軸に従わせるのではなく、個々人の暮らしを保障する場だと位置づけました。共同生活の場としての一定の制約は避けられませんが、できる限り、プライベートな空間を大事にしたいと思ってきました。しかし、その思いを具体的に支えるのは現場の職員です。

時々、当事者からの訴えがあります。あまりに管理的・抑圧的な世話人に対しては、話し合いの結果、辞めてもらったこともあります。管理的・抑圧的という言葉は、道徳的・教育的とも読み替えることができます。辞めてもらった世話人も、個人的にはきつちりした人で、入居者に対しては「善意」からの「指導」を続けていたと言えます。彼からしたら、「ええ加減な世話人を放っておいて、なんで自分が注意されるのか」という腹立たしさでいっぱいだったと思います。

Bくんのケースで言えば、自由を求めるBくんと、管理面をないがしろにできない事業所がどう折り合いをつけるのかという問題がこれからもつづきます。かつて私たちは「入所施設から地域へ」という流れに希望を見出しました。そして地域の代名詞がグループホームでした。いざグループホームを始めてみたら、「グループホーム」＝地域とは言えない現実に直面してきました。AくんやBくんは、私(たち)の揺れや迷いを感じて見抜きます。「お前も口で言うてることと、していることは違うやないか」と。したたかな彼らは、自分の生活スタイルを貫くための駆け引きを繰り返してきます。

この夏、東京のたこの木くらぶの人たちと交流する機会がありました。彼らは、長期刑で刑務所に収監されているTさんの支援に取り組んでいます。自然体で淡々とした取り組み報告を聴いていて、私たちのバタバタぶりを、改めて反省させられると共に、元気をもらってきました。

いずれ詳しい報告をしなければなりません、私たちも「触法」のメンバーと関わっています。彼は短期刑で、もうすぐ出所します。彼は(出所したら)ゆうとおんで働く」と言っていました。しかし、刑務所側は私たちの面会を一切認めません。彼は、もともとゆうとおんにいた人で、今もゆうとおんのメンバーです。私たちは、彼の思いに依拠してゆうとおんでの受け入れを準備してきました。ゆうとおんは意欲も能力も体制も十分だ、などと思ったことはただの一度もありません。もつといいところが出てきて、彼がそこを気に入ったのなら、それでもゆうとおんへ、などとは露ほども思っていないません。

しかし、あらかじめ選択肢を奪っておいて、密室状態のなかで「自己決定」という形式を取り付けようとする姿勢に疑問を抱かずにはおれません。刑務所側は、彼が生きていく中で身に着けた、迎合しやすいという「障害特性」を利用して、出所までに彼の進路を決めようとしています。アンフェアというしかありません。久しぶりに、「国家権力」という言葉がよみがえってきました。

9月9日、河野秀忠さんのお通夜がありました。河野さんは『そよ風のように街に出よう』の編集長を務める等、障害者運動の世界ではかなり有名な人です。たくさんの方がきていましたが、通常のお通夜とは一味違った進行でした。

私は障害者運動という領域にはほとんど無縁で、よく知っている河野さんは50年近く前、沖縄問題や反戦運動にかかわっていた時のリーダーの一人としての河野さんです。お通夜でみなさんの発言を聴いて、「口八丁・手八丁」は死ぬまで健在だったんだなあ、改めて懐かしく感じました。

その河野さんが紹介してくれた坂井悦子さんも7月に亡くなりました。私なんか疑り深いところがあるから、その能力とリーダーシップは十分認めつつ、大風呂敷の熱弁を話半分に聞いていました。実直な坂井さんはかなり河野さんを崇拝していたようでした。あのだれにもまねのできない話術は、あの世でも健在だと思います。今頃、坂井さんたちを楽しませているのでしょうか。

この40年間、細々としたつながりでしたが、時に世話になり、アドバイスももらいました。10年ちょっと前、「相変わらず、脇が甘いなあ」というのが、最後のアドバイスでした。合掌。



絵：福島 正人

全体研修のお知らせ



10/26 (木) 時間：18：00～20：00

テーマ

「ゆうとおん」で働く「自分」を見直すとは？

あなたが研修に参加する目的はなにか。研修に参加してあなたは何を学びたいのか。自分をどうしたいと考えているのか。せっかく研修に参加するのだから、おもしろい研修をうけたい、そして、自分を高めたい、とあなたは思っておられるでしょう。そんな研修にできればと考えています。そのためにも、あなたには是非他人事としてではなく、自分事としてこの研修に参加して下さい。この研修では、2017 年 5 月に行った虐待防止のアンケートも参考にして考えたいと思います。

講師

堀 智晴 さん (ゆうとおん理事)

1947 年生まれ。ゆうとおん理事。長い間、障がいのある子どもの保育、教育について、現場の保育者や先生と共同研究してきました。今は、学校卒業後に、障がいのある人が地域の中でどう生きていけばいいのか、について考えています。みなさん、一緒に考えましょう。

一九九六年設立

ゆうとおんの思い
 活気があるけれど
 ゆったりしていて
 真剣だけれど
 かたくなることなく
 とりあえずそこにいれば
 心と体がホッとする
 どこにでもありそうで
 どこを探しても
 なかなかみつからない
 そんな《しごとば》を
 つくりたい
 ひくつにならず
 ごうまんにならず
 小さなちがいに
 とらわれず
 小さなことも
 ないがしろにせず
 失敗もたくさんして
 どんどん
 じゆうになつていきたい

社会福祉法人 ゆうとおん

本部 / 〒581-0834 八尾市萱振町 2-133 TEL 072-993-0785 FAX 072-993-0784
 ゆうとおんはーと / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-68-1 TEL 072-926-6200 FAX 072-926-6199
 ゆうとおんうえーぶ / 〒581-0817 八尾市久宝園 2-30-4 TEL 072-926-1543 FAX 072-921-8883
 ゆうとおんほーぷ / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-73-2 TEL 072-927-1300 FAX 072-927-1301
 スタコラハウス / 〒581-0802 八尾市北本町 1-1-11 TEL 072-995-4387 FAX 072-995-4387
 メールアドレス / youtone@live.jp ホームページアドレス <http://www.eonet.ne.jp/~youtone>
 年会費 / 1 口 2,000 円 振込先 / 郵便為替口座 00910-9-106532

発行人 / 関西障害者定期刊行物協会 大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4 階

定 価 / 50 円